

皆地笠

みなちがさ

しばやすお

芝安男さん

和歌山県知事指定伝統工芸品に認定されている「皆地笠」を作るのは、本宮町皆地に暮らす芝安男さんただ一人です。その昔、この地方に隠れ住んだ平家の公達が、香り高い檜を使つて笠を編み出し、熊野詣での人々に広く愛用されるようになつた

といわれています。いつからか産地の名前をとつて「皆地笠」と呼ばれるようになりました。

山に入り、節のない樹齢60年以上の檜を見極め伐採した後、木が柔らかいうちに「材」にしていく作業は、大変根気のいる仕事で、1つの笠を

作るまでに7つの工程があり、それぞの材料を作るところから全て手作業。「檜を薄く均等に削る『材』作りが一番大切なんですよ。これを間違えるときつちりと編めないんです」

芝さんは子供の頃から父親の仕事を見て育ち、その作り方を覚えたと言います。「昔は他にも8軒ぐらい笠を作る家もあつたけど、今では私だけになりました。大坂や奈良から弟子入りを志願してくる人もいましたが、作り方の本があるわけでもなく、いい檜の選び方が書いてある物もないですからね。途中で断念していましたね」



ひとの手とモノづくり



松煙

しょうえん

堀池 雅夫さん



堀池 雅夫さん

日本でただ一人「幻の墨」を昔ながらの製法で作り続いているのは、鮎川で工房を営む堀池雅夫さんです。自然災害等で折れたり枯れたりしたアカマツを10年以上置いておくと、周りの部分は白く腐つて、脂の多い赤身だけになります。それを小割りにして不完全燃焼で燃やして煤を取つてていきます。小さな炎でゆっくりと燃やすため、5分おきに松をくべ足すのですが、500kgの松を1日8時間、計100時間ほど燃やしてようやく

10kgの煤が取れるという大変な作業です。集めた煤に膠を少しずつ加えながら乳鉢に入れて丁寧に練りこみ、乾燥させて墨が完成するまで約半年間もの時間を要する貴重な墨が「松煙墨」です。「松煙墨」は何と言つても、その美しい滲みと青みを帯びた黒い色にあり、書道家だけでなく芸術家にも愛用者が多くいます。堀池さんは顔料を混ぜて色を付けた墨「彩煙墨」を作など、伝統を守りながら新たな取組にも挑戦しています。

紀州備長炭

きしゅうびんちようたん



江戸時代の元禄年間に備中屋左衛門が、秋津川で焼かれていた白炭に「備長炭」と名付け、売り出しました。今では田辺市の特産品となっています。

In the Edo era (1603-1868), Bichuya Chozaemon started selling white charcoal produced in the Akizugawa area. He named it "binchotan," and it has been a special product of Tanabe ever since.



右から
滝尻 哲雄さん
田村 桂樹さん

「常に高品質な世界一の炭を作るのが、私たち炭焼き職人の仕事です」

胸を張つてそう言うのは、秋津川にある紀州備長炭記念公園内の窯で炭を作る職人さんたち。

紀南地方の山間部で行われている紀州備長炭づくりは、樹齡20~40年のウバメガシの原木を切り出し「木ごしらえ」という作業から始まります。

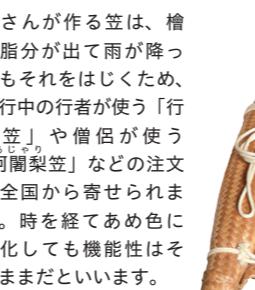
これは、曲がったウバメガシをまつぐにする作業で、高品質な備長炭づくりのために欠かせない工程です。奥の方から窯に詰めた後、窯口で火を焚き、煙の色が変わるまで3~5日ほど焚いと炭化させていきます。その後、窯口を塞ぎ、220度~650度ほどの温度で、6~9日間かけてしっかりと炭化させていきます。

20度~650度ほど

の温度で、6~9日間かけてしっかりと炭化させていきます。その後、窯口を

を少しづつ開けて空気を送り、じつくり温度を上げていき、精錬をかけます。

「黒糖を焼いたような甘い匂いのときは良い出来、きつい匂いのときは出来、他にもいろいろあるんや。このときの匂いで炭の出来上がりが分かる」と言います。炭化した原木を窯口近くに寄せ、かき出して、空気においてて一気に1200度近くまで高めてから引き出します。そこに土と灰を混ぜた消し粉「素灰」をかけて空気を遮断し、消化することで焼き締めます。職人が約15日かけて作り上げた紀州備長炭は、世界に誇る高品質な炭として知られています。古くから受け継がれてきたこの製炭技術は、昭和49年、県の無形民俗文化財に指定されました。



"Minachigasa" is a conical hat made with a lubricant from cypress trees that repels rain. Orders for this hat come from all over Japan.